わくらば

病葉の踊り

黒岩 重吾

黒岩重吾短編傑作選

講談社文庫

定価420円

病葉(わくらば)の踊り

黒岩重吾(くろいわじゅうご)

昭和57年6月15日第1刷発行

発行者　三木 章

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21　〒112

電話　東京 (03)945-1111(大代表)

振替　東京 8-3930

デザイン　亀倉雄策

製　　版　豊国印刷株式会社

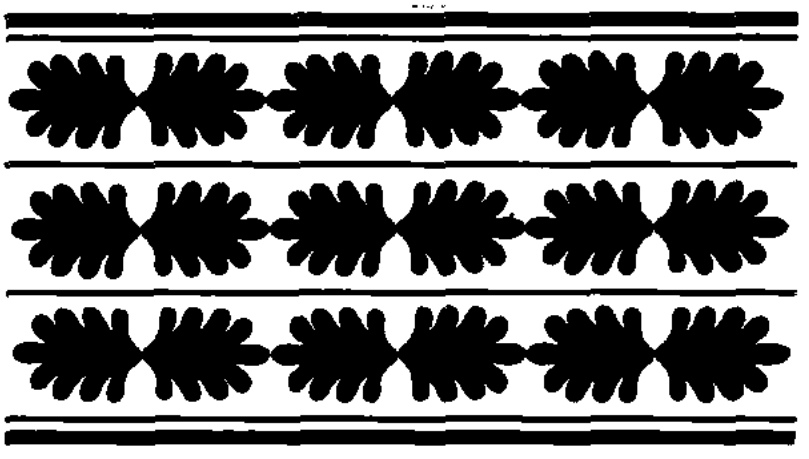
印　　刷　豊国オフセット株式会社

製　　本　株式会社国宝社

© Jugo Kuroiwa 1982

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。



講談社

目次

北満病棟記　七
賭博の街　六一
相場師　一〇五
病葉（わくらば）の踊り　一四七
墓地の俳優　一九三
神経科と温宮氏　二三七
深夜の競走　二五七
病葉の浮く川　二八七
天穴は見えず　三二三
解説　郷原宏　三七六
年譜　三八二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

病葉（わくらば）の踊り

北満病棟記（ほくまんびょうとうき）

一

私が余りに馬鹿げた軍隊生活に全くもう愛想をつかし、丁度全部隊員の喀痰検査があったのを幸い、かねがね怪しいと睨んでいた戦友木山の喀痰を自分のとすり変え、七号菌保持の危険患者として林口の病院に放り込まれたのは候補生として採用されてから二ヵ月目の二十年の三月一日だった。

病院に入るや再度の喀痰検査に、勝手知らない廊下を手探りに真夜中重症患者の部屋に忍び込み、かたかた慄える手で死人のような病人の枕元のブリキの痰壺の蓋を取り、どろどろした痰を眼を光らせながら紙に包み、得たりとにやにや笑ったのも、またレントゲン検査には鉛筆の粉末を入れた薄い紙袋を、生来の器用な手捌きにものをいわせ、手品師よろしく軍医の前で胸に貼りつけ、ざまみろと力一杯息を吸い込んだのも、ただ内地へ帰って軍隊から解放されたいという、熱病のような妄念からだった。だがそのように願った内地還送も、結局戦争の悪化と共に取り止めになり、思いもよらず更に現地の三等分院に転送されることになった時は、もう怠惰な病院生活にも幾分なれ、嵐のように狂い廻っている戦争を傍観しながら、静かな山の中で病人として生活するのも悪くはないと、私は自嘲的に呟くようになっていた。

そしてその日私は零下二十五度の厳寒の中を護送の四十前後の衛生兵と防寒衣で着膨れた身体

を持ち扱い兼ねながらやっと夕暮の該地に辿り着いたのである。

空は数千万里の無限の深さを持つ、だがその果てに宇宙の底を見せたような生ある大深淵となって地上を蔽っていた。そして西の空の連鎖状の雲は、小丘のゆるやかな起伏がやがて波のように消えて行く広漠とした地平線上に没した落日の残映に真紅に光り、その濃青磁色の大深淵の秘具のような壮厳さで、この東満の大自然を圧していた。北方の巍々とした連山も、この大空と大地の前では、白雪の上半身を淡紅色に染めてただ羞ろう乙女のようにたよたよしかった。右手の小丘のかげの黄色い土塀にかこまれた土茅屋の満人部落から立ち昇る煙が、やがて空中で帯のように拡がり夕靄となってあたりにこめているのが、僅かに人間の住む世界であることを思わせる。目指す病院は、私が立っている丘の次の小丘の中腹に、上から下にへばりつく如く建っていた。灰色の古びた五棟の病棟、しかもその五棟を真中から串刺しにしたような長い棟が、それだけは何故か真黒に塗られて、周囲の白色に際立って醜い傷痕を与えている。なんという奇妙な姿だろう。むかで、げじげじ、いや十本足のとかげ、私はじっとそれを眺めているうち、急に身体が寒くなり、ぞっとして身体を小刻みに慄わせた。そうだ、それはまさになまのままのむき出しの死の姿だ。死という抽象観念でなく、長い苦悩と憔悴の末、痩せ衰え死んだ骸骨そのままの死の姿である。そういえば得体の知れない朦気までが纏いつくようにその病舎を取りまき、透き通る冷たさを湛えて、中にいる病人達の魂を冷やしているような気がする。

私は慌てて病舎から眼をそらした。上空を白と黒に彩られた朝鮮烏が二羽微かな羽音を立てて入陽の空の方に飛んで行く。私の眼は自然と丘陵の無限の起伏をじっと眺めやるのだった。とそれは何か巨大な大地全体が蠕動しているようで、何時か私に、多分幾十年の昔、東満匪賊達が互

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

におたけびを挙げ、折からの夕陽に血に塗られた槍尖を五色に輝かせながら闘争したであろうこの大地が、何時の日かまた静寂の歴史を破り、血に狂う人間達の浅ましい葛藤の呻きを予知して、黙々と蠢動して墓穴を掘っているような幻覚を与えるのだった。私はほっと息をついた。と最前から大きな手套で鼻の頭を擦りながらうろうろと周囲を眺めていた老衛生兵は、左手の手套をぬぐとポケットから煙草を出し火をつけた。が煙草を吸いながら右手の手套で矢張り鼻の頭を擦っている。それは明らかに凍傷を防ぐというより寧ろ、冬においては暇さえあればそうすることを命じた上官の命令に対する、盲従的な哀れな兵隊の機械的動作である。手套で鼻の頭を必死で擦るたびに筋肉が引攣るためか、その衛生兵の張りのない眼は、張りのないままぎらぎら光りぐっと前進するのであるが、それは何か本能そのままといった醜悪な圧迫感を私に与えるのだった。巨大な、だが人間世界を離れた地の果てとでもいった大自然の刺すような圧迫、そして衛生兵の醸し出す余りにも本能的な動物臭との圧迫、それは間もなく私が味わおうとする見忘れられた療養生活の不吉な暗示でもあったのである。

病院に入るや、私は直ぐ診察室に連れて行かれた。四十前後の脂ぎった額に太い横皺を食い込ませた軍医は、私が持って来たレントゲン写真を窓明りに一寸透かして見た。

「お前こりゃ悪いぞ、慢伝の下病棟だ」

軍医はそのレントゲン写真を机の上に放ると、如何にも退屈し切っているという様子で、あくびをしながら私を虫けらのように眺めた。

「お前も若いのになあー、で部屋は何号か聞いているか」

「五号室が良いと思います」

軍医の濁った声を語尾ですくい上げ、瞬間に漉したような見事なリズムで答えると、机に片手をかけて立っていた一人の看護婦が直立の姿勢を取った。間一髪をいれない五号という言葉は、明らかに最前からその看護婦の胸の中に予定されていた言葉である。私は先刻から気になっていたその看護婦の容貌をはっとしてもう一度見直した。女には珍しい斜線を引いたような眉毛が顔の総べてを鋭く統括している。そして両内側のまなじりから眉毛の延長のような暗い線が、大きな眼の下に陰欝な隈を描き、削げた頬の窪に消えていた。その顔は何か少女の日、夢を見るように開き始めた花弁が、恐ろしい氷雪の衝撃に、花弁を閉じることを忘れたような哀しい冷やかさと、暗い萌え始めた女の匂とを発散させていた。香里賤子、私は後でその看護婦の名前を知った時、香里ほど自分自身の容貌にそっくりな名前を持った女はいないだろうと驚いた程である。香里は私のそのような視線を別に気にするふうもなく軽く私を見返した。

「じゃ、病室の方に参りましょうか」

二人は診察室を出て、狭い廊下を歩いて行った。私の荷物を右手で持ち、ぶらんぶらんさせながら大股で歩く香里の後を、自分は胸部疾患の重症患者なのだ、と心にいい聴かせながら私は小股に歩きわざと息を切らせてみたが、直ぐそんな態度が浅ましくなり、苦笑を浮かべると急に足を早め香里と並び自分の荷物に手をかけた。

「看護婦さん良いですよ、荷物は自分が持ちますから」

肩をすくめて微かに笑うと、香里は意外にもその荷物を私に渡し、ぐんぐん歩き出した。私は何んだか肩透かしを食ったような堪らない間の悪さに、その軽い荷物が鉛玉のように重く感じるのだった。

いま、私が歩いている廊下は、先刻丘の上から見た、あの五棟を串刺しにしている黒く塗られた長い病棟である。外部にもまして内部は陰気に崩れ果てていた。廊下の漆喰はだらしなく剝げ落ち、脂の切れたような黒ずんだリノリュームの床は、所々腐った木の醜い大きな傷口を露出し、天井の壁土は今にも落ちそうに無数の罅でたるんでいた。そして私と香里が歩いて行くと、その病棟は微かな軋りを響かせるのだった。いやそれは二人のためではない、それは特に生命を終えようとする老廃物が、何処か地の果てから流れこんで来た山野の風の囁きに、もの哀しく独り呟いているのかもしれない。

やがて廊下は、大きなガラスの嵌った二重戸で仕切られていた。ガラス戸の先は石畳になっており、その先にはさらに大きなガラス戸が、暗い光を放つ鏡のように突っ立っていた。そこまで来ると香里は立ち止まり、眼を開くようにして私を見た。石畳の場所は両側の壁に窓もなく香里の白衣が浮いて見える程暗かった。そのためか香里の顔の中の大きい黒い瞳は、ちょうど透明な液体の中に沈む黒水晶のようなにぶい光りを放ち、眼の下の陰鬱な線は消え、頬骨のあたりが蒼白く浮いて、何時の間にか顔全体に仄暗い神秘的な情感がしびれるように纏いついている。私は余りにも急激な香里の変化に思わず息を呑んだ。と香里が静かな調子でいった。

「ここから先が慢伝よ、貴方ここに入ったら多分二、三年は出られないわ」

だがその言葉の調子は意外にも馴れ馴れしく、もう普通の意味での看護婦対患者の言葉になっている。勿論それは当然のことだ。そしてその看護婦対患者の言葉こそ、あの白衣と同じく、飢えた兵隊達の中にあって、女達が自分の身を無事に処し得る一線なのであった。その言葉は男の心の中に真向から飛び込み、そしてその心を押し包み、男の獣慾を盲目にしてしまう、男達は自

分の獣慾がその奇妙な風呂敷に眼隠しされているとも知らず、あれ程戦野の中にあって気狂じみる程昂っていた本能が不思議にも病院内では静まっているのを、いぶかりながらも大抵は看護婦達と無邪気にふざけることのみで満足するのである。今私は香里のその看護婦らしい言葉にふと裏切られたような腹立たしさを感じた。ああ、何んという気障な自惚れだろう。文科出身の哀れな学徒兵よ、お前はとうに温室から荒野に放り出されているのに、まだ温室にいた時の気障な美を頼りにしているのか、私は唇を噛みながら、「これより先慢伝病棟」と墨で書かれた木札の下っているガラス戸を体で押すようにして開けるのだった。

五号室は剝げた桃色の壁と、薄黄色い天井に囲まれた五坪ばかりの細長い部屋である。東側の病庭に面した窓から、四つのスプリングの毀れた鉄製のベッドが疲れ果てた体を横たえている。床から窓枠までが普通以上に高くそのため僅かに残っていた黄昏の最後の微光は窓下の床にまで達せず、そこに薄暗い闇をつくっていた。窓際のベッドには眼窩の深い頬骨のとがった護送患者の佐野が寝ており、一つベッドを置いて担送の浅利が、蒼黄色くしなびた頭から先を、赤ん坊のように羽根布団から突き出していた。

香里は私の荷物を、佐野と浅利の間の空いているベッドになおすように私にいうと、ドアの横の壁にある電灯のスイッチを捻り、病庭に面した窓の暗幕を荒々しく閉めた。その暗幕の内側は真紅の色だ。それは一瞬華やかな色彩を放ったが、直ぐ陰欝な周囲の壁に押されて沈み始めた。色が沈むというのは妙だが、私はその部屋一面を蔽った暗幕が、次第々々に部屋の奥深く沈み、小さな真赤な切れ端し、だが絶えずこ奴は一体何者だろうと意識せずにはいられないような切れ端しとなって、部屋を見据えているように感じたのである。暗幕を引き、電灯をつけることに

よって、部屋は薄暗い黄昏から深夜に変った。廊下の外の光りはすりガラスを通してこの部屋に入る程強くはない。そしてそのすりガラスにも底深く真紅の布切れがぼんやりと沈んでいる。私は急にぞっとした。病人の臭いが鼻をつく、私は力なくその示されたベッドに腰を下ろした。すると無表情な顔の中に、何処か一点微笑のかげを浮かべようと努力している表情で寝ていた佐野が上半身を起した。

「香里さん、暗幕を引くのは早いよ、俺達はまだ飯を食っていないんだぜ」

それは何か新しく来た私にいい訳しているような風である。茅屋を覗かれた極貧の、だが昔は富者だった人間が感ずるような羞恥、何故だろう。勿論私は重症の佐野があの病人特有の勘で私の健康を見抜き、激しい圧迫を感じているのに気づかなかった。

浅利は布団から顔だけ出して、私と香里を代る代る舐めるように眺めていたが、この時香里の視線が私に注がれているのを見ると、自分は閉めた方が良いです……と呟き、急に苦しそうに咳き入った。枯れた力のない咳がこんこんと断続し、その合間には、はーという微かな絶え入るような溜息とも泣声とも解らないような声が洩れる。私はぎょっとして浅利の顔を見た。細長い顎の上に出歯のためか唇の辺りが盛り上り、苦しそうに開いた口から白っぽい色のさだかならぬ歯と粘っこい大きな歯齦がのぞいていた。と香里が浅利の傍にやって来て、死魚の腹のような額に手を当て、駄目ね……と囁いた。そしてそのままじっと浅利の顔を見ている。ふと私はフランスの中世紀の絵画に何かこの光景に似たものがあったような気がした。そしてそれは確か優しい絵ではなく不気味な絵であった。

もう十時過ぎだろう、眠れないままに床の中で輾転としていた私は、佐野ががたぴしいわせて

手箱を開け、中から大型の薬瓶を取り出すのを見た。佐野はベッドの上にあぐらをかくと私が眠っていないのを知っていたらしく、その薬瓶を大きく二、三回振り、どうです一ぱいやりませんか、コップを出しなさいよ……と私に突き出すのだった。私が身を起しながら、「それは何ですか？」と尋ねると、

「なあーに中国酒ですよ、然しこ奴がなかったら到底こんな所におれませんよ、何しろ普通の人間なら二、三ヵ月で丸っ切り変った性格になる程狂った雰囲気ですからね」

にやりと笑い、アルミのコップに注ぐ手付は慣れたものである。一息呑むとほっと大きく息をつき佐野は私に向き直った。

「貴方は未だお若いようですが、死を怖れなくっちゃ駄目ですぜ、ここで一番危いのは死ぬのが平気になることです、死ぬのが、然しそうなっちゃ、その時こそ貴方が死神に完全に捕まった時です、わしがそうです」

佐野は盛岡近在で林檎園を経営している相当な地主の三男だった。昭和八年衛生兵として現役を満洲で済ますと一旦郷里に帰ったが、長兄が胸の病で死に、そりの合わない次兄が跡を継ぐと同時に家を飛び出し、在満時代の女の許へと再び海を渡ったのである。そして今ではその女と一緒になり、病院から一里程離れたうらさびれた街で、防疫隊の軍属をしていた。勿論初めは身体を大陸に埋める積りだったが、中等程度の農林学校も卒業し、軍属として務めてもう五年にもなるのに、未だ判任官にもなれず、しかも自分より年次の若い現役志願の伍長や軍曹に何かにつけ下目に見られるのが全く不愉快で、それに大きな鉄筒を秘密らしく備えつけては、怖るべき新武器の研究だなどといって、細菌の培養に夢中になっている軍医達が阿呆らしく、何時かは故郷に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com